

日中経済交流研究会新聞

日中経済交流研究会 9月例会報告

売上100倍、中国ビジネス30年戦記

～日中逆転、現場からの報告～

報告者：松井味噌株式会社 代表取締役社長 松井 健一氏

日時 2019年9月17日(火) / 場所 大阪産業創造館

参加者 52名

松井氏は、会社を承継した際、このままではいつか限界が来るという思いから25歳という若さで海外進出を決意。何度にもわたる調査を経て、天安門事件が起こった翌年（1990年）に中国へ進出することを決意されました。その後、2008年には売上190億円（進出当時から比べたら約100倍）にまで成長。昨年、日中経済交流研究会の訪中団が松井氏の中国の現地法人である工場を訪れた際「この社長の話はぜひ日本の会員にも聞いていただきたい」という思いから今回の例会報告を企画・依頼し快諾をいただきました。当日は50名以上の方が集まり、松井氏の独特の視点からの報告に耳を傾けました。



中国は危ない国か？

暴動だとか、反日運動だとかいろんなことが報道されているせいか「中国で商売していて大丈夫か？」とよく聞かれます。でも考えてみてください。中国や日本以外の海外では、夜、街を歩けないとか、命の危険を感じるといった場所はたくさんあります。それに比べて中国では、夜でも女性も子どもも歩けます。最低限の命の安全は保障されています。これは個人情報を守るという点では問題かもしれませんが、中国はすべての国民を監視し、管理しようとしているからです。そうすることで犯罪は起きにくい環境、つまり安全な状態が保たれているのです。日本はどうでしょうか？中国から見れば、全く管理されていない、カギが開けっ放しのような状態です。ある意味日本は今安全です。しかしそこが狙われるようになると考えられます。どちらがいいかというのは言えませんが、安全であるということとはとても大切です。

食の安全に関しては中国の食品は危険だと考える人が多いと思います。しかし実情は、大手を除いて日本の食品企業は中小企業どころか零細企業が90%を占めており食の安全の国際基準に達していないところがほとんどです。日本では食品は輸入が中心で輸出は微々たるもので、国際基準に適合する工場は少ないです。中国の輸出食品工場は世界の規格HACCPやISOに準拠し工場併設のLABOも100%完備している状態です。伝統産業で100年前の工場も珍しくない味噌工場は中国の食品工場から見ると輸出基準に達していない工場が大半なのです。

中国では原料の米・大豆にしても最高の品質のものが手に入り、またそしてそれらもすべてトレーサビリティが確立されており管理されているのです。国際競争力という観点から

だけでなく食品業界は輸出食品という視点では日本は中国に大きく遅れをとっているのです。

中国でビジネスをやるうえで必要なこと

中国でビジネスをやるには何が必要かといえば、私は次の三つを挙げたい。

一つは「鉄壁のビジネスプランを立てる」です。3～5年は、中国人が参入しづらいビジネス、かつ圧倒的なアドバンテージを持てるものであること。

二つ目は、スピード。日本では議論ばかりで何も決まりません。中国は、決定権者がどんどん判断して前に進めます。決定できる人物が、その場で決めそして即行動に移していかないと遅れを取るようになります。

最後に「運」です。人はよく想定外なことが起きたと言い訳をしますが、想定外で逃げていたらダメで、あらゆることにどこまで保険を掛けるか、ビジネスがギャンブルに終わらないために何を考え、どんな準備をしておくか、常に手を打っておくことが重要です。運を呼び寄せるためにも可能性を考え、手を尽くし運から見放されない準備をしておくことが大切です。

まとめ

松井氏はお話の冒頭で「企業は、利益がないとだめです。利益があれば、みんなが幸せになれる」ということを強調されています。そして今回の全体からうけるメッセージとしては、一方からだけではなく、あらゆる角度・視点から物事を見て、自分で判断し行動を起こすことの重要性を我々に伝えてくれたのだと思います。

（まとめ 広報委員 株式会社ギャレークルー 合田耕作）